コンカニ語ー言語か方言か
Konkani: a language?

児玉　望
Kodama Nozomi

§0　序

インドにいくつの「言語」があるか、という問いに答えることは容易ではない。たとえば（国勢調査の数字に従って[1]）「数百」と答えたにしても、その大多数は文字をもたず、これらの中には「方言のようなもの」という関係にあるグループが必ず含まれるからである。そもそも「言語」と「方言」という用語の区別と、それがはらむ問題は、これらの用語が使用される文脈ごとに異なっている。

20世紀以降の構造主義言語学の文脈においては、ある言語体系を「言語」と呼ぶか「方言」と呼ぶかの区別が単なる名称の違い以上の意味を持たない。たとえば、ソシュール流の言語 langue の定義に従えば、

1.「(社会方言であれ地域方言であれ)あらゆる方言はそれぞれに構造をもつ言語である。」

という言明は、たとえば鹿児島方言の二型アクセントの整然とした体系を観察してみれば、じゅうぶんに納得がいくはずである。

一方、このような構造主義言語学に先立つ歴史言語学は、「言語の系統分類」という分類学に取り組み、上位分類と下位分類の組み合わせとしての「言語」と「方言」というモデルを定着させた。

2.「現代日本語は数多くの地域方言・社会方言から成り、そのうちの一つ、現代東京山の手方言が標準方言 standard dialect としての地位を占め、書き言葉方言 written dialect の母体となっている。」

という表現は、このモデルに従うものである。これは、

2'.「インド・ヨーロッパ語族は多くの語派から成り、そのうちの一つ、インド・アーリヤ語派は、最大の母語話者を持つ。」

という表現とパラレルである。このような、互いに他と明瞭に区別された「個」としての言語体系を定義し、それらはお互いのもつ史的関係に応じて分類できる、とするモデルを

基礎とした歴史言語学が比較言語学であり、このような「個」としての言語体系とその自律的な変容を、話者集団とその歴史から独立して対象化しようとする試みが構造主義的な言語観へとつながっていると考えられる。

比較言語学的な言語変化モデル（系統樹説）は、言語変化によって、異なる言語体系が生じると、この二つの体系の差異は復元不能で交じり合うこともない、ということを暗黙の前提としており、たとえば鹿児島方言のアクセント体系のように、別の体系との間で（部分的な）借用関係が生じにくいと考えられる体系的な構造的特徴を基準にして言語を分類する。これに対して、方言の体系自体が必ずしも「個」として相互に独立して変化するのではなく、体系の中の要素である個別の語や語形の革新が、方言（場合によっては言語）の枠を超えて波のように伝播していく、というタイプの言語変化（波状説）に着目し、さまざまな語や語形の連続的な分布のあり方からある地域の言語の経てきた言語を探る歴史言語学が言語地理学である。これは柳田國男（『蝸牛考』）により、いわゆる方言周圏論というやや変形された形で日本でも広く知られるようになり、「方言」という語で個別の語や語形（方言形）を指す用法が、

3．方言の中には古語を伝えるものがある。

という形で一般化するひとつの契機となった。

このような言語変化のあり方は、「個」として方言を捉えるために大きな問題となる。たとえば、分布の異なる複数の特徴によって二つの方言が区別される場合、これらの二つの方言の中間となる方言が存在することは大いに可能である。比べるべき特徴の数が増えていけば、これらの中間的な方言の数も、話者の数を上限としてではあるが、どんどん増えていく、ということになる。このように、方言を截然と区別するように同じ分布を示す言語特徴群が定義できない場合、これらの方言群は、方言連続体 speech continuum を成す、という。方言連続体は、たとえば熊本県の各方言においても観察される。終助詞「バイ」「タイ」と接続助詞「バッテン」「ケン」の使用は、ステレオタイプとして「熊本弁」に結びついているが、これらは「熊本弁」であると同時に「長崎弁」でもあり、九州北西部にひとつの方言区画（肥筑方言）を成すように見える。しかし、熊本県内でのこれらの語形の分布は必ずしも同じではなく、熊本県南部に向けて、方言連続体を構成しながら、この4つのいずれの形も用いられない鹿児島県側の方言へと連なる。これに対して「行かねばならない」を意味する「イカナン」「イカニャン」は「熊本弁」であるが、「イカンバン」は「熊本弁」ではない。（「長崎弁」「天草弁」ではあるかもしれない。）この場合の「熊本弁」（「長崎弁」「天草弁」）は、方言連続体のある地点での語形を指しているだけであり、

他と区別されるべき体系を定義づける特徴としてこれらの語形が捉えられるわけではない。

このような方言連続体は、実は、二つの言語の間にも観察される。「一般言語学講義」の第4部「言語地理学」の中で、ソシュールは、フランス語とイタリア語、ドイツ語とオランダ語の境界線が明瞭には引けないことを述べ、「言語」と「方言」の違いが質的なものではないことを指摘している。ソシュールは、言語の系統分化の初期において地理的に連続的に分布している言語であれば言語変化は必ず波として伝播して連続体を作り出すのが自然であり、言語や方言が(「個」として)系統分化するのは、何らかの理由で二つの言語(または方言)の中間的な諸方言が失われて不連続が生じるからにすぎないとする。中間の方言の喪失の原因としては、ひとつには、移住(流出入)によって言語変化の波が遮断される場合であり、もうひとつは、文字言語などの共通言語が連続体の一部にのみ影響を及ぼして言語変化を促して不連続を生じる場合とをあげている[2]。後者の場合、文字言語伝統という、社会的な要因が「言語」を作り出していることになろう。

ヨーロッパのインド・ヨーロッパ語の場合と同様に、古典語という単一の文字言語伝統が広範囲に通用する時代が長かったインド亜大陸のインド・アーリヤ語族の場合も、無数にある方言が連続体を成す場合が多い。特に周辺部に発達したローカルな文字言語伝統を中心として、いくつかの大言語を数えることは可能であっても、これらの境界がどこまでかは、話し手自身にとっても言語学者を含む外部の観察者にとっても俄かには判じがたい場合がままある。このような状況は、文字言語伝統のほとんどなかった方言が、政治的な理由で、他の大言語の影響を排除して新たな文字言語を定め「個」としてのステータスを主張するとき、言語学をも巻き込んだ形での言語問題を生みやすい。現在、「デーヴァナーガリー文字で書かれた」という限定つきで、1987年に連邦直轄から州の地位を得たインド西海岸ゴアの州公用語となり、また、1992年にインド憲法に定める公用語(Scheduled languages)に加えられた「コンカニ語(Konkani; コークニー、コーンクニー[3])」は、その代表的な事例である。コンカニ語が「言語であるか、方言であるか」という問題は、先に述べたように言語学では解決不能なのであるが、多くの言語学者がこれを、「コンカニ諸方言が「個」と認められるかどうか」の問題に翻訳して、それぞれの立場から結論を出そうとしたのである。

小論は、コンカニ語とその研究の歴史を概観し、このような分類学的な言語史研究が、言語学にとってより重要であるはずの「どんな言語変化が起きたのか」を等閑視してきたのではないか、という問題を提起し、この方向での言語史解明のために、コンカニ諸方言の研究がもつ重要性と現時点での展望とを述べたい。

§1　コンカン諸方言をとりまく社会史

§1－1　諸方言の分布

急峻な西ガートの山地が海岸近くまで迫るインド西海岸は、内陸のデカン高原とは異なる風土のもと、内陸とは異なる独自の民族移動の歴史を経てきたと考えられ、インド・アーリヤ系言語の分布も、内陸部とは異なっている。インド・アーリヤ系言語話者が多数を占める地域が、インド亜大陸ではもっとも南まで伸び、その先端に位置するのがゴアである。その南はドラヴィダ系言語話者が多数を占める地域で、マンガロールまでのコンカン海岸南部でカンナダ語、トゥル語、マンガロール以南のマラバール海岸でマラヤーラム語が多数の地域となるが、これらの地域にもインド・アーリヤ系のコミュニティー方言を維持している多くのコミュニティーがあり、その大多数がコミュニティー単位で西海岸沿いを南下して定住したと考えられる。

ドラヴィダ系言語地域では、これらのインド・アーリヤ系方言の話し手は二言語使用であり、文字言語としては、カンナダ語あるいはマラヤーラム語を使用する。自らの方言を文字表記したい場合にも、それぞれカンナダ文字とマラヤーラム文字が使われる。ゴア以北のインド・アーリヤ語地域でも、

・コミュニティー単位で方言が異なる（コミュニティー単位の移住による）

・文字言語としては土着でない言語が用いられ、標準方言がない。

という点では同じである。プラークリット・サンスクリットといった古典語の使用が長いのは、インドの他の地域と同様である。この地域で文字言語として使用されるようになった地方言語は、まずカンナダ語であったと考えられ、多くの方言において、動詞「書く」は、カンナダ語 bare- からの借用である。次いで 13 世紀、デカン高原北西部をヤーダヴァ朝が支配した時期からマラーティー語資料 Old Marathi が多数残るが、デーヴァナーガリー文字が主流であったデカンと異なり、ゴア周辺では当初はカンナダ文字でマラーティー語を書くことが普通だったようで、このようなゴア・カンナダ文字（Goykannadi, Kandvi）のマラーティー古文書を出版した Ghantkar (1993) によれば、14 世紀の銅板文書が存在するほか、ポルトガル統治下の 16・17 世紀に至っても、ゴアの村落文書はこの文字で書かれるのが普通であった。マラーティー語は現在、コンカン海岸北部の多数言語であり、同じインド・アーリヤ系言語としてゴアでも使用人口は多かったと見られ、実際これらの文書には、内陸部のマラーティー語とは異なる方言的特徴も見出される。ただし、後述するように、このマラーティー語が、コンカニ諸方言とは異なるものとして使い分けられていたと考えられる証拠があり、土着の言語とみなすことはできない。

§1－2　ポルトガルのゴア占領

マンドヴィー川とズアリ川の河口に挟まれたゴア島は、有史以来、インド洋の重要な貿易拠点であったと見られ、インド亜大陸のさまざまな政治勢力の進出が繰り返されるが、1510年、ポルトガルがゴア島をビジャプールのスルタンから奪取し、さらにその対岸地域を編入して以降、ゴアはインドの他の地域と切り離された歴史を辿ることになる。ゴアの住民の強制的なキリスト教改宗が行なわれ、ゴアの各コミュニティーは、カースト制度を維持したままキリスト教文化を受け入れた。

一方、ゴアでのキリスト教布教のために、ヨーロッパ人宣教師は住民の言語(Concanim または Canarim[4])を学び、現代インド・アーリヤ語の中では最初に辞書や文法書が編まれた言語となった。1548年に改宗した日本人初のキリスト教徒アンジローが郷里鹿児島へザヴィエルを案内する前に学んだことでも知られるゴアの聖パウロ神学校では、土着語としてグジャラーティー語と Canarim 語が教えられた。1556年にはゴアにイエズス会所有の印刷所も設置され、ゴア人修道士アンドレ・ヴァジュ Andre Vaz が著した『キリスト教要理』Doutrina Christam が出版されたとされるが、現存しない。ローマ字表記によるポルトガル語との二言語辞書[5]は、イエズス会士リベイロ Diogo Ribeiro (1560-1633)がイエズス会士のために1570年以降写本として書き足したものが1626年に出版された。英国人イエズス会士トマス・スティーヴンス Thomas Stephens (1540-1619)が著した文法書 Arte da Lingoa Canarim は1640年に出版された。興味深いことに、スティーヴンスは、インド人への布教のために『キリスト伝』Christa Purana を著したが、これは、ローマ字転写のマラーティー語の韻文で書かれている。この事実は、ゴアでも文学語としてはマラーティー語を用いることが適切であったと判断したからではないかと推察される。スティーヴンスに限らず、ヨーロッパ人たちはゴアで二つの言語が使われているということを知っていた。

ただし、土着語の文学伝統がまったく無かったかと言い切れるかどうかは微妙である。その点で興味深いのが、ポルトガルのブラガ古文書館所蔵の800ページ以上にわたるローマ字写本 Braga Codices[6] である。内容は、コンカニ語散文による『ラーマーヤナ』と『マハーバーラタ』で、南インドの地方言語が文字言語化される際に必ずといっていいほど韻文で翻案されるインド古典文学作品である。作者不詳ながら、クリシュナダース・シャルマ Krusnadas Shama をはじめとする南ゴア・ケロシ の住人(Kelosikar)に帰されており、何らかの写本をローマ字転写した可能性が強いが、散文であることから、他の何らかの言語の原作をもとに即興的に創作して翻案したものを口述したという可能性も捨てきれない。これらの作品をデーヴァナーガリー文字に転写して出版したオビリーニュ・ゴミシュ

Ovilinho Gomes は、原作は 15 世紀ではないかと推論する。

17 世紀にはキリスト教宣教師によるコンカニ語文学作品も生み出された。現存するものでもっとも早い時期のはフランシスコ会士アマドール・デ・サンタナが著し 1607 年にゴア・カンナダ文字で印刷された『聖人伝』Flos Sanctorum で、写本がパリのフランス国立図書館に残る。[7]

しかし、主としてヨーロッパ人が主導するコンカニ語の文字言語化は、同じくヨーロッパ人の側の都合で打ち切られることになる。まず、行政末端に至るまで公文書のポルトガル語化が進められ、ゴア・カンナダ文字文書は 1629 年を最後にみられなくなる。(注) 続いて、17 世紀後半から 18 世紀にかけて異端審問が活発となり、土着語の使用が異端的(異教的) 要素の混入を招きやすいという理由から、教会でのコンカニ語の使用はしばしば抑圧されるようになり、文学的な伝統は 19 世紀までほぼ途絶えることになった。

§1－3　キリスト教徒の移住

ゴアで吹き荒れた異端審問は、単に宗教上の運動であるだけではなく、政治的な派閥闘争の要素ももっていたようで、18 世紀にはゴアのキリスト教徒の大量移住もしばしば発生した。移住先としてはゴアの南のカンナダ語地域がもっとも多く、マンガロールとその周辺には大きなコンカニ・クリスチャンのコミュニティーがある。この地域にはほかにも多数のインド・アーリヤ系言語のコミュニティーがあるが、キリスト教徒は移住の年代が歴史的に特定できる稀な例となっている。19 世紀のマンガロールは、バーゼル・ミッションの宣教拠点であり、コンカニ・クリスチャンの方言に基づいてコンカニ語と英語の 2 言語辞書や文法書が編まれ、現代カンナダ文字表記のコンカニ語文書が出版されるようになった。

マンガロールのコンカニ語話者にはもう一つ、ヒンドゥー教徒のサーラスワットという有力な商業コミュニティーがあるが、彼らの移住はポルトガル人来航以前に遡ると考えられ、その方言もゴアとは分断され独自の歴史を歩んできたため、キリスト教徒コンカニ語話者とサーラスワットのコンカニ語話者はコンカニ語での意思の疎通が困難なほどに異なる。従って、サーラスワットは彼らのコンカニ語を専らコミュニティー内のコミュニケーションに使用し、他のコンカニ語とは接触しにくい条件下にあった。しかし、商業的に成功したサーラスワットが英領インド帝国の経済と情報の中枢であるボンベイに進出し、他の有力コミュニティー同様にコミュニティー・ネットワークを拡張しはじめると、コーチンやデカンなど他地域のサーラスワットと連帯するにあたって、「コンカニ語」という言語

の共通性がコミュニティーのアイデンティティに組み込まれるようになっていった。おそらく、他の地域のサーラスワットとのコミュニケーションにおいても、マンガロールのサーラスワットがコミュニケーション上の困難に直面したことは想像に難くない。逆にいえば、キリスト教徒との方言差も「コンカニ語」のアイデンティティーにとってさしたる障害にはならなかっただろう。こうして、マンガロールはコミュニティー方言を超えて「個」としてコンカニ諸方言を捉えようとする動きの中心となっていく。

ただし、このような運動が可能であったのは、後にみるように、ドラヴィダ語地域であるマンガロールで、コンカニ諸方言の輪郭が明瞭であったことが大きい。この地域においては、コンカニ語は「キリスト教徒またはサーラスワットの言語」として捉えられるようになり、他のインド・アーリヤ系言語を話す小コミュニティーは、言語的な親縁に拘わらずコンカニ語に無関心であった。

§1－4　コンカニ語 vs. マラーティー語

一方、ゴアではコンカニ諸方言をめぐる環境は激変することになった。そのきっかけは、ポルトガル領ゴアの地理的拡大である。18世紀前半までゴアを脅かしたマラータ同盟が衰退し、1759年に和議が成立すると、ゴアはその支配地を内陸部へ広げる。この新占領地 Novas Conquistas においては かつてのような強制改宗は実施されなかったから、ゴアの人口にヒンドゥー教徒が加わることになる。この地域のヒンドゥー教徒は文字言語としてデーヴァナーガリー文字（および速記体のモーディー文字）表記のマラーティー語を使用しており、自らの言語がマラーティー語と近い関係であることを自覚していて、コンカニ語を「個」としてマラーティー語と区別する必要を感じていなかった。このため、19世紀に入り、支配者ポルトガルがかつてのキリスト教資料を掘り起こし、コンカニ語の再興を促したときも、ヒンドゥー教徒の関心は薄く、むしろインドとのつながりを維持するために、コンカニ語はマラーティー語の口語方言であるとする論調を強めるサルデーサイ Samba Sardessai (1879-1967) のような独立運動家も現われた。これに対し、キリスト教徒側は、ローマ字表記のコンカニ語正書法を確立し、聖書をはじめとするコンカニ語出版物も現われるようになる。しかし、有力なキリスト教徒は、むしろ文字言語としてはポルトガル語を使用したほうが有利でありと考え、コンカニ語の文字言語としての使用は限定的なものに留まった。

ゴアの独立運動は、ポルトガルの独裁政権支配下でインド独立と連動することがなかったが、1961年、インド軍は武力でゴアを解放する。

インド併合後のゴアで、言語問題は直ちに政治問題と直結することになる。マラーティー語派のヒンドゥー教徒は、マラーティー語言語州であるマハーラーシュトラ州との併合を求め、キリスト教徒はコンカニ語の独自性を盾に併合に反対した。人口の点ではキリスト教徒が劣勢にあったが、マハーラーシュトラ州に繋がるコミュニティーネットワークを持たないヒンドゥー教徒は併合に消極的であったから、住民投票の結果、圧倒的多数の支持でゴアは連邦直轄領として単独行政区域として維持されることになった。

§1－5　公用語論争とコンカニ運動

コンカニ語かマラーティー語かの問題は、その後、かなり現実的な展開を見せることになる。ゴアの州昇格を前にした1986年、州公用語の問題は、デーヴァナーガリー文字表記のコンカニ語を採用することで決着をみた。デーヴァナーガリー文字表記のコンカニ語の読み書きができればマラーティー語の読み書きに特別の訓練はいらず、インド併合後、ゴアに流入したマラーティー語の出版物を日常的に読むだけでよい、という程度の言語差だからであって、言語名をコンカニ語としたのは、ゴアの独立性を主張するための政治的な配慮で、市場に流通している印刷物はマラーティー語が圧倒的である。政治的な駆け引きの結果、マラーティー語にも準公用語の地位が与えられた。コンカニ語のキリスト教出版物は従来通りローマ字表記のものが多いが、近年はデーヴァナーガリー表記も採用されている。国勢調査では、母語をコンカニ語とするものとマラーティー語とするものの比率は2対1程度である。

一方、「コンカニ運動」は、ゴアという領域を超えて、「コンカニ語」を母語とするコミュニティーのネットワークとして機能している。コンカニ語に括弧をつけたのは、相互の意思の疎通という点ではゴアのマラーティー・コンカニ両言語よりも困難であり、表記する文字もデーヴァナーガリー文字・カンナダ文字・マラヤーラム文字・アラビア文字・ローマ字と多岐にわたっていて、およそ統一がないからである。しかし、総人口200万人程度の規模ながら、海外移住者を交えた国際コンカニ会議等もしばしば開かれ、各地のコンカニ語・コンカニ文学研究機関に支援を行なっている。

§2　コンカン諸方言をめぐる言語学

コンカニ語がインド・アーリヤ系であるのは間違いがないとして、それが他のインド・アーリヤ系諸語、特にマラーティー語とどのような関係にあるのか、という問題は、まず19世紀にヨーロッパ人たちが取り上げた問題である。動機はさまざまであった。たとえば、

アジアのすべての民に聖書を翻訳してもたらすべきだ、と考えたバプティスト派セランポール・ミッションのウィリアム・ケアリ William Carey (1761-1834) は、コンカニ語の聖書が必要かどうか頭を悩ませた[8]。マンガロールでコンカニ語の辞書と文法書を書いたイエズス会のマッフェイ Angelo Francesco Saverio Maffei (1844-99) は、コンカニ語はマラーティー語から派生したものだが、にもかかわらず独自の言語であると考えた。英領インド帝国の行政官たちも、インドの多様な住民とその言語を効率よく把握しておく必要があり、そのためにヨーロッパで当時盛んになっていた比較言語学を援用し、系統分類を試みた。インド・アーリヤ系諸言語を他の語族と区別するのは容易であったが、その下位分類は必ずしもはかばかしい成果をもたらさず、コンカニ語とマラーティー語の分類もその例外ではなかった。

最初はヨーロッパ人だけが取り組んだこの系統問題にやがてインド人研究者も積極的に加わるようになる。これらの研究の成果は、コンカニ語が言語か方言かをめぐる論争でしばしば引用されただけでなく、いずれかの立場に立っての研究に引き継がれた場合もあった。

§2－1　グリアスン＝コノウによる系統分類

現代インド・アーリヤ語を系統分類するための 19 世紀のさまざまな試みを総括するのが、インド全土で大々的に行なわれた『インド言語調査』Linguistic Survey of India である。全 19 巻、364 の言語・方言を記述・分析する大著の指揮を執ったのはグリアスン George Abraham Grierson (1851-1941) であるが、インド・アーリヤ諸語の南部語派としてマラーティー・コンカニ諸方言を取り扱った第 7 巻は、ノルウェー出身の若手研究者コノウ Sten Konow (1867-1948) によって執筆された。

採集された標本は、コミュニティー方言を単位としてマラーティー・コンカニを合わせ 94 に及ぶ。ただし、マラーティー諸方言の調査は、英領インドの行政区画を単位として行なわれており、ゴアと、マドラス管区に属するサウスカナラ県（主都マンガロール）という、現在のコンカニ語の主要分布地域が含まれていないのである。しかし、ゴアの南北に隣接するマラーティー語地域・カンナダ語地域の方言の標本は興味深い。

コノウは、南部語派のこれらの方言については、かなり確信をもって系統分類を行なっている。「マラーティー語」は比較的均質な構造をもち、下位方言としてコンカニ方言だけをもつ、という分類である。マラーティー語とコンカニ方言 Konkani Dialect は、共通のプラークリットから早い時期に枝分かれし、二つの方言群を成す、ということになる。

グリアスン＝コノウの記述は、コンカニ語がマラーティー語の方言である、と主張する人々に繰り返し引用されるようになった。もっとも、グリアスン＝コノウの記述は、正確に言えば、「マラーティー＝コンカニ祖語（＝なんらかのプラークリット）」が二つに枝分かれした一方がコンカニ（諸方言）であり他方がマラーティー（諸方言）である、と述べているだけだから、方言か言語かは単なる用語の問題であるともいえる。しかし、この用語法の点でコノウ自身がマラーティー諸方言（言語）とコンカニ諸方言（方言）の間で正当な理由なく格差をつけている、という印象は否めない。たとえば、コンカン地方に分布する、マラーティー語の方言は、コンカン標準語 Konkan Standard と分類され、コンカニ方言と区別されている。

言語学的により問題なのは、「個」として「マラーティー＝コンカニ祖語」とその下位分類の「コンカニ（祖）語」あるいは「マラーティー（祖）語」を定義する方法があまり厳密ではない、という点であろう。「マラーティー＝コンカニ祖語」は、他のインド＝アーリヤ系諸言語とは不連続な共通の言語変化を経て分化したものである、というのが前提であるが、コノウは、中期インド・アーリヤ語のうちの、マハーラーシュトリー語及びマハーラーシュトリー＝アパブランシャとマラーティー語（つまり「マラーティー＝コンカニ祖語」）との間の連続性の議論にこだわるあまり、変化を経ないで維持されてきた特徴の議論に終始している。また、「コンカニ／マラーティー」の分類基準にしても、たしかに比較的明瞭であるとはいえ、個々の標本に目を移すと、たとえば、コンカニ側に分類されているラトナギリ県のチトパオン・ブラフマン方言のように、むしろマラーティー側の特徴が多いと思われる中間的な方言が存在しているのである。

§２－２　ブロックとカトレーの言語史再構

マラーティー語とコンカニ語の言語史研究にとって画期的な研究が、フランス人ブロック Jules Bloch (1880-1953) の『マラーティー語の形成』(La formation de la langue marathe) である。ブロックは、中期インド・アーリヤ語から古マラーティー語に至る言語変化を順序だてて解明し、あわせて古マラーティー語に現われる語彙の語源をサンスクリットに遡って解いてみせたのである。ブロックの研究は、若手のインド人研究者を刺戟して、インド各地の言語について同様の研究を産むことになった。

ブロックのインド・アーリヤ語史に関する立場は、グリアスン＝コノウとは対照的で、基本的にインド・アーリヤ語は方言連続体を成していて、系統分化仮説が成り立たない、というものである。たとえば、プラークリットのいわゆる諸方言にしても、本来は方言分

group)を形成していることを主張しているのみである[10]。この「語群」も、グリアスン＝コノウの場合と同様に、真に比較言語学的な意味で（共通の言語変化によって）定義できる分枝でないのは明らかであろう。

§２－３　マラーティー対コンカニ

ゴアのインド併合後、コンカニ語の言語学的な位置付けをめぐる参考資料として、さまざまなコミュニティー方言についての記述的研究が、マラーティー語方言派・コンカニ語派の双方から出されるようになった。

たとえば、マハーラーシュトラ州の文学文化委員会は、『マラーティー語方言調査』と題するシリーズの刊行をはじめ、その第１巻として、『サウスカナラのコンカニ』(Ghatage 1963) を選んだ[11]。グリアスン＝コノウ的な定義に従っての「マラーティー語」方言調査である。以降、このシリーズでは、主としてコンカン地方に焦点をしぼり、コンカニ・マラーティー双方のコミュニティー方言を全体として同じフォーマットで記述する、という方法がとられている。全体として、両方言群の共通性（と差異）がわかりやすい構成になっているが、それ以上の系統論には踏み込んでいない。

これに対し、コンカニ側からは、国勢調査報告付録モノグラフ・シリーズの一環として、自らもコーチン出身コンカニ話者である J. Rajathi によって、ケーララ州（マラバール海岸）とカルナータカ州・ゴア・マハラーシュトラ州（コンカン海岸）のコンカニ語に関する調査報告が出されている。特に戦闘的なのは、第４巻のケーララ州編(Rajathi 1976)で、コンカニ語がマラーティー語と区別されるべき 12 の特徴[12]を列挙し、ケーララ州の８つのコンカニ方言（サーラスワット方言６種と、クドゥンビ・カースト方言２種）がすべてこれらの特徴を充たすとする。これらの基準を部分的にしか満たさない方言は、マラーティー語との混成方言である、と断じている。コンカニ純粋主義的な主張であり、マラーティー語との共通点はいわば「汚染」としてのみ捉えられているわけである。第８巻のカルナータカ・ゴア・マハーラーシュトラ編(Rajathi & Kulshreshta 1982)ではこの立場は弱められている。マラーティー語に近い地域のコンカニ諸方言には「混成」的なものも数多いからである。ただし、これらの混成の解釈は、依然として大言語であるマラーティー語からの影響（借用）、という偏見に支配されているようであり、２つの異なった語形や特徴が対応する場合、どちらがより古いと考えるべきか、という観点からの比較言語学的な分析は行なわれていない。

化があったかもしれないが、古典語化して地域とかかわりなく使用されるようになっており、これらの諸言語のいずれかに各現代インド・アーリヤ語の祖形を求めるのは意味がない、とする。さらに、コンカニ語とマラーティー語との関係については、コンカニ語や、コンカン地方のマラーティー方言には、北西のグジャラーティー語との共通の語彙や文法上の特徴が多くみられ、マラーティー語とグジャラーティー語を結ぶリンク（あるいは中間言語）とも見なすことができる、とした。この考え方に立てば、コンカニ語も、グジャラーティー語やマラーティー語と同等に、サンスクリットに源を持ち、言語変化の波をかぶりながら現在の形となった「言語」ということになる。以後、コンカニ語が言語である、とする議論は、決まってグジャラーティー語に至る「西岸的特徴」でマラーティー語と区別される、という主張が加えられるようになった。

ブロックに刺戟されて、コンカニ語史を概観する著作は、サーラスワット・コミュニティー出身で、幼少時にマンガロールで育ったカトレー Sumitra Mangesh Katre (1906-1999) によって、1936 年から 1942 年まで Poona Journal という雑誌に連載された『コンカニ語の形成』The Formation of Konkani である[9]。カトレーの著作は、コンカニ諸方言をサンスクリットまで遡る上でたいへん貴重な資料を提供しているのであるが、興味深いのは、現在のコンカニ語として、単一の方言ではなく、チトラープール・サーラスワット、ガウダ・サーラスワットという二つのマンガロール・ヒンドゥー方言、ゴア・ヒンドゥー方言、マンガロール・ノースカナラ・ゴアの 3 つのキリスト教徒方言という 6 つの方言を主として並置している点である。同じ語彙が残っている場合、特に音韻の面でマンガロールのヒンドゥー方言が保守的であることが、比較することによって明らかにわかり、方言比較語彙研究の資料という性格も保持っているのである。

マンガロールのヒンドゥー方言が、語末短母音や語中二重子音を保持するなど音韻的に保守的なのは、早い時期に他のインド・アーリヤ諸語から切り離され、現代インド・アーリヤ語（NIA)に至る言語変化の波を被らなかったことで説明できる。逆に言えば、音韻的な特徴に関する限り、言語変化の波はゴアのインド・アーリヤ系諸方言に、コンカニ語であるとマラーティー語であるとにかかわらず等しく影響を与えたことが、『マラーティー語の形成』との比較からもわかるのである。

カトレー自身は、このようなコンカニ諸方言間の比較と分析によって、コンカニ語の方言分化の過程を解明する、という方向での研究には着手していない。むしろ、ブロックと同様に、コンカニ諸方言が、一方でグジャラーティー語、他方でマラーティー語との共通点を持つことを指摘し、これらの諸言語がインド・アーリヤ語の南西語群(South-Western

§2－4　方言研究の進展

前節で取り上げた研究は、マラーティー＝コンカニ諸方言であれ、コンカニ諸方言であれ、ある分類に属する方言が、多様な中にも共通な性質を見せるはずである、という結論が先にある研究だという点で、目的こそ違えよく似ている。しかし、これらの研究はむしろ、特に、コンカニ方言の間に見られる違いを明らかにしているようでもある。特に、ドラヴィダ語地域に話されているインド・アーリヤ系方言の場合、他の同系方言との接触が絶たれた状態に置かれているため、共通の言語変化は起こりにくい。したがって、共有している特徴は、おそらく保持された特徴だと断定できるわけであるが、そのように保持されている特徴が、移民方言間で食い違っている場合に、これを比較言語学的にどのように解釈すべきか、という問題は、特に興味深い素材を提供しているようにも思われる。

純粋に比較方言学的な、言語変化の解明という観点からのコンカニ語方言研究も、数は少ないがないわけではない。たとえば、Miranda (1978) は、コンカニ語のコミュニティー方言を社会言語学的な観点から観察した論文であるが、その中で、ゴアの旧占領地のキリスト教徒方言のうち、特に南部の方言が、主として音韻面でアルカイックな特徴を保持することを述べ、新占領地からの移民であると考えられるヒンドゥー方言が北部方言と同様の、語末短母音の喪失という音変化を経ていて、同じ地域のコミュニティー方言に、史的変化の位相の異なりによる方言差が生じていることを述べた上で、同じような位相の差が、マンガロールでは遅くやってきた移民であるキリスト教徒方言で新しくヒンドゥー方言で古い、という逆転した関係にあることを指摘する。

・ヒンドゥー方言、キリスト教徒方言、といった単純化した見方が危険であること

・インド西海岸では、コミュニティーと地域の組合せが「個」としてのコミュニティー方言の単位となっていること

・語末短母音の喪失という音変化は、これらのコミュニティー方言に横断的に影響を与えた言語変化の波であったこと

を指摘している論文であるといってよい。カトレーの研究で示されているマンガロール・ヒンドゥー方言の古風な特徴は、同じように言語変化の波から隔離された状態の長かったゴア南部のキリスト教方言に共有されているのである。

本論で概観してきた、コンカニ語・マラーティー語の分化を、比較方言学の手法で純粋に言語学的に解明しようとした研究としては、Southworth (1976) がある。この時点までに行なわれたコンカニ語とマラーティー語の諸方言の記述研究のうち、動詞形態にのみ着目し、共通の特徴に応じて等語線の束で分類し、それぞれの等語線について、どちらから

どちらへの言語変化であるかを検討した上で、それらの言語変化の時間的前後関係を推定する、という内容である。もとにしている二次資料の信頼性に若干問題があると考えられる点や、分析の細部で必ずしも同意しかねる点はあるが、結論として導かれる言語変化仮説で、コンカニ諸方言とマラーティー諸方言の分岐が最初の分岐にならない、という点が、斬新であると思われる。つまり、はじめにコンカニ対マラーティーという分類の図式を置くことが根本的に誤っているのではないか、という視点を提供している点で、この古くて解決不能な問題に風穴を開けているようにも思われる。

§3　分析と展望

以上、コンカニ語がマラーティー語の方言であるかどうかの言語学的には答えのない問題をめぐって、関係方言とそれを分析する言語学研究がどのような歴史を経てきたかを手短に述べてきた。この問題を言語学で解ける形に置き換えると、次のようなことになる。

A　コンカニ諸方言とマラーティー諸方言が共通して経て、かつ、これらの言語以外のインド・アーリヤ諸語には伝播しなかった言語変化があったのか。(コンカニ／マラーティー諸方言は、「個」としての語派を成すか)

B　コンカニ諸方言だけ、または、マラーティー諸方言だけが経て、他方には伝播しなかった言語変化があったのか。(コンカニ諸方言またはマラーティー諸方言は、「個」としての語派を成すか)

C　2つの諸方言に混成がある場合、これをどう解釈すべきか。

AとBでは仮に「語派」という語を使用したが、この用語自体には意味はない。純粋に比較言語学的に表現すれば、「共通祖語」という名の「言語」を仮定できるか、ということである。これらの問題について、具体的な言語事実も交えて検討する。

§3－1　コンカニ＝マラーティーは「個」と認められるか

コンカニ語とマラーティー語に共通としてコノウが挙げている類型的特徴の多くは、たとえば3つの性（ジェンダー）の維持のような保守的な特徴であり、従って、一方で西のグジャラーティー語、他方で東のオリヤ語やベンガル語と一致しているのは驚くには当たらない。いずれの言語も、インド・アーリヤ語が話される地域の周辺にあたるわけであり、これらの古い語形を置き換えた言語変化の波が届かないということは、じゅうぶんに予想可能だからである。東とも西とも保守的な共通点が多い、ということは、逆にいえば、西からの変化も東からの変化も同様に及びにくかった、という解釈も可能ではある。つまり、

西側に対しても東側に対しても、中間的な方言が生じにくいほどに孤立していた、と言い換えることもできるだろう。

では、保守的な特徴の点では共通点の多いコンカニ／マラーティー諸方言が、お互いには孤立していなかった、ということを証拠立てるような、共通の言語変化はあるだろうか。数は少ないが、ないわけではない。一部の例を挙げる。

・音韻

[s]/[ʃ] [ts]/[tʃ] [dz]/[dʒ] の異音としての分布

・形態

属格接辞 [-ts/tʃ-] 動詞完了副分詞接辞 Ko [-un(u)] Mar [-ūn(i)] 未完了副分詞 [tānā][13]

ただし、コンカニ語、マラーティー語は、共にドラヴィダ系の言語との接触が長く、ドラヴィダ系言語からの共通の借用があれば、それも共通の言語変化ということになる。上記のうち、音韻の項目の口蓋化異音は、デカン北部の地域的な特徴でもある。2－3でも挙げたように、ドラヴィダ語地域のヒンドゥー移民方言を除いてほとんどの方言が経ていることから、17世紀までにゴアで、デカンではそれより早く完了していたと見られる語末短母音・二重子音の喪失の例もあり、音韻変化が言語の境を超えて伝播したケースとみることもできよう。

ドラヴィダ系言語と共通する文法的特徴は本論では取り扱わないが、助動詞構文などの構文の面でもコンカニ諸方言とマラーティー諸方言には共通点が多いことのみ指摘しておく。[14]

§3－2　コンカニあるいはマラーティーは「個」と認められるか

表題の「あるいは」に注意が必要である。コンカニが「個」であることとマラーティーが「個」であることは、必ずしも表裏一体ではないからである。グリアスン＝コノウの仮説のように、まず2つの言語に枝分かれし、さらにこの2つから相互に干渉することのない多数の言語変化の波によって現在の方言群が生じた、とするならば、2つの語群がともに「個」として対等に区別されるレベルでの語群となる。しかし、言語の系統分化においては、ソシュールに従うならばそのような2分割は例外的である。一旦方言連続体が生じ、そのうちの一つが他から隔離されることによって言語が分化する、としたならば、言語変化を共有する方言群として下位のレベルの枝を構成できるのは、分化した言語だけだからである。方言連続体の残りの部分は、まさに、分化した部分の残り、としてしか言い表せ

ないような方言の集合を構成することになる。

このように考えてみると、現在の話者数からみれば大言語であるマラーティー語が、系統樹上でもコンカニ語より上位の分枝である、と考える必然性は何もないことがわかる。「マラーティー（祖）語がコンカニ（祖）語の方言である」という命題は、言語学的には「コンカニ（祖）語がマラーティー（祖）語の方言である」という命題と同程度に検討に値する命題なのである。コンカニ語のステータスをめぐる言語学的議論は、このような視点を欠いているように思われる。コンカニ語言語論者の議論でしばしば見受けられるのは、2－2で取り上げたRajathi (1976)のように、コンカニ語諸方言の一貫性を示そうとして、逆にその多様性を前に沈黙する、という振る舞いであるが、むしろ、大言語であるはずのマラーティー語のほうが方言差が小さいのだとすれば、マラーティー語の分枝が新しいということを疑ってみてもよいのではないだろうか。

マラーティー語とコンカニ語を分けるとされるマラーティー語の特徴のうちいくつかは、明らかにマラーティー語の側での言語変化を想定しなければならないものである。音韻上の変化としては、デカンのマラーティー語の脱鼻音化、形態に関しては、たとえば1人称単数代名詞の語形交替の単純化（Ko hāv(ā)/ma-; Ma m-)や、コンカニ諸方言では活用に応じて、また方言に応じて出没する環境が異なる不定詞形成接辞 ū～un の消失、存在動詞 の音形（Ko as-; Ma āh-)などがこれにあたる。

§3－3　「混成」をどう捉えるか

コンカニ語やマラーティー語の方言記述でしばしば目にするのが、(コンカニ語とマラーティー語の）混成とかリンクといった表現である。コンカニ語の特徴として定義したものと、マラーティー語の特徴として定義したものの両方の特徴を併せ持った方言に対して適用されることが多い。たとえば、ゴアの北方のクダーリー方言は、存在動詞 as- の過去形の語幹と時制接辞にマラーティー語と同じく不規則な hot- が現われ、また、一人称単数代名詞の語幹が mi- と単純化している点で、他のコンカニ方言と異なる、とされる。

このような「混成」は中間言語、つまり、コンカニとマラーティーの間に方言連続体が生じていることを意味するようにも思われるが、インドのコミュニティー方言の場合、地理的な方言と異なり、明瞭に連続体を辿ることがほぼ不可能である。従って、そのような混成が、言語変化の伝播の結果として発生したのか、あるいは、散発的な（一回性の）借用によって生じたものなのかを判定することが難しい。

ことに、マラーティー語地域で話されているコミュニティー言語については、確かに借

用の可能性が濃厚な場合もあるだろうし、グリアスン＝コノウには「コンカン標準語とコンカニ語をつなぐリンク」というような、このような解釈をしているのではないかと受け取られる記述もある。しかし、気をつけなければならないことは、過去に存在した方言連続体の一部が残存している場合にも同様の「混成」がみられる、ということである。

マラーティー語の影響がまったくないドラヴィダ語地域のインド・アーリヤ系言語について「混成」が見られる場合には、むしろ過去の方言連続体の一部が保持されている、というように解釈するのが自然であろう。もちろん、この場合でも「借用」の後に移住してきたという可能性も否定できないのであるが。

いずれの場合においても、「混成」が発生した場合、まず言語変化の方向を特定し、また借用が起きやすいかどうかを考慮しなければならないだろう。たとえば、上記のクダーリー方言の過去形 hot- の例は、新たに借用したと考えるよりは、他のコンカニ方言が喪失したものを保持していると考えたほうが自然であると思われる。

§3－4　まとめ

コンカニ語とマラーティー語の関係を考える上で鍵を握るのは、両方の言語の混成のように見える方言であると考える。コンカニ語は方言差の大きい言語であるが、これらの方言差が必ずしも新たに生じたものではなく、かつて存在した方言連続体の状態を伝えている可能性があるからである。特に、ドラヴィダ語地域に孤立して維持されているコミュニティー言語の場合には、タイムカプセルのような役割も期待され、これらの言語特徴がどんな言語変化の途上にあるのか、という視点から精密な記述研究を行なっていくことが必要であろう。

小論の結びに代えて、ドラヴィダ語地域のこのようなコミュニティー言語研究の場面で実際に起こりうる研究者の経験について紹介しておく。

1－3で述べたように、マンガロール周辺地域では「コンカニ語」はキリスト教徒かまたはサーラスワット・コミュニティーの言語として理解されており、その他のインド・アーリヤ系言語を話す移民コミュニティーは、自分のコミュニティーの言語がコンカニ語だと考えることはまずない。にもかかわらずコンカニ語の特徴をもつ言語であれば、研究上の都合上、コンカニ語の方言と分類したくなる場合がある。そして、そのことを研究成果の論文に書き、英語の読める資料提供者に読ませ、大いに不興を買ってしまう、ということがありうる。

インドのコミュニティー言語の話し手達にとっては、「われわれの言語」それ自体が「個」

なのであって、その言語をコンカニ語であれマラーティー語であれ何らかの大言語に他国の研究者から分類してもらわなければならないということはないのである。言語に名前があることをうらめしく思いながら、ほんとうに調べたいのは「あなたがたの言語」がコンカニ語かどうかではなく、それがどのような言語変化を経て現在に至ったかなのだ、という説明に四苦八苦しながら考えたことを、このような形でまとめてみた。

注

1) 1991 年のインド国勢調査報告では、人口 1 万人以上の言語の数を 114 とする。このうち 18 が Scheduled Languages と呼ばれる憲法に定める公用語である。マラーティー語人口として数えられているのは 62,481,681 人、コンカニ語として数えられているのは 1,760,607 人。共に Scheduled languages である。1961 年国勢調査の詳細な言語調査報告では、分類不能なものや外国語を含め言語の総数が 1652、このうちインド・ヨーロッパ語族系の言語の数が 574 である。
2) Saussure (1916, 1985) p280
3) 短母音脱落や脱鼻音化した発音となる方言では言語名の発音も異なる。
4) Canarim は、明らかにカンナダ語との混同である。しかし、この名称は比較的長く使用された。「バラモンの言語 Lingoa Bramana」という名称もしばしば使われる。
5) Ribeiro, Diogo. 1626. *Vocabulario da Lingua Canarim feito pelos padres da Companhia de Jesus na christandade de Salcete.*
6) Codices no 771-772. Arquivo Distrital de Braga.
7) スペインの Biblioteca de El Escorial にも写本があるとする記述もあるが、詳細不明。
8) Pereira (1971) 参照。
9) 後に Katre (1966)としてデカンカレッジより出版。
10) カトレーの南西語群は、シンハラ語を含んでいる。Katre (1966) p171 参照。主として音韻上のイノヴェーションにより南西語群と分類した後、語彙の共通性によりグジャラーティー語・マラーティー語双方との親縁関係を論じている。なお、サーラスワット・コミュニティーは、そのコミュニティーの名を、カシミールにあったとされるサーラスワット川に結び付け、北西インド出自を主張する。
11) このシリーズでは、マハラーシュトラ州側のクダーリー方言、ゴア南部（新占領地）Kankon のコンカニ方言、カーサラゴード県ナーヤク・コミュニティーのマラーティー方言が取り扱われている。
12) Rajathi (1976)の 12 の基準は以下のようにまとめられる。(p51)
    1. 男性名詞強変化主格語尾　-o cf. マラーティー　-a
    2. 名詞語末に短母音　-i
    3. （現在分詞起源の）現在形定形動詞に性の一致がない
    4. 動詞 1 人称語尾に数の区別がある。
    5. 対格／与格接尾辞 k- cf. マラーティー l-/n-(/s)
    6. 属格語尾に c- 系列と l- 系列の二種。cf. マラーティー c-系列のみ。
    7. 存在動詞の語幹は、現在・過去共に as- cf. マラーティー 過去語幹 hot- < *√bhu
    8. 目的不定詞語尾　-ka～-ca:ka cf. マラーティー　-re
    9. 能格語尾に単複の区別　-ne/-ni
    10. 1 人称単数代名詞主格・能格に hãv- cf. マラーティー mi:（主格・能格共通）
    11. 能格構文で、目的語の格にかかわらず目的語の性・数に動詞が一致。
        cf. マラーティー 対格表示の目的語は動詞と一致しない。
    12. （語彙）

    この分類は、あまり体系的とはいえない。たとえば、5 と 8 は相互に独立ではない。マラーティー語でも目的句分詞形では与格と共通の接尾辞が現われる。また、たとえば、能格動詞構文での主語・目的語二重一致など、マラーティー語に非常に特徴的ないくつかの現象への言及がない。

また、どのコミュニティー方言がこの基準を満たさないかの判断も恣意的に見える。マラータ・ブラフマン出自を主張するカーサラゴード県のカラーダ・バラモンのコミュニティー方言では、上記の基準に合わないのは 6 だけであるが、この方言では属格語尾として c-系列のほかに th-系列を持っている。

13) Katre (1966)では、-c- < -tya-ka-, un(u)/-n(i) < aunu/auni < *-tuaNNau etc. < サンスクリット -tvam および-trīnam に遡るという説をとる。

14) たとえば、コンカニ語に特徴的とされる否定動詞活用が、マラーティー語の一部の方言にも見られるほか、現在は痕跡的にしか見られない否定辞前置による否定動詞の形成と、ドラヴィダ系言語によくにた分布は、コンカニ・マラーティーに共通のイノヴェーションであったと考えられる。Kodama (2001) 参照。

[参考文献]

Bloch, Jules 1914, 1920. *La formation de la langue marathe.* [*The formation of the Marathi language* / Translated by Dev Raj Chanana. 1970. Delhi: Motilal Banarsidass]

da Cunha, Gerson J. 1881. *Ensaio Historico da Lingua Concan.* Goa: Impresa Nacional.

Ghantkar, Gajanana Shantaram Sinai 1993. *History of Goa through Goykanadi Script.* Goa: Rajhauns Vitaran.

Ghatage, Amrit Madhav 1963. *Konkani of South Kanara.* Bombay: State Board for Literature and Culture

Gomes, Olivinho J. F. 1999. *Old Konkani Language and Literature: The Portuguese Role.* Goa: Konkani Sorospot Prakashan

Grierson, George Abraham 1905. *Linguistic Survey of India* Vol.VII. Calcutta

Katre, Sumitra Mangesh 1966. *The Formation of Konkani.* Poona: Deccan College

Kodama, Nozomi 2001. "Convergence Pattern in Tuluva: A New Scope for Comparative Studies." In P. Bhaskararao and K.V. Subbarao eds. *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics.* 185-205. New Delhi: Sage Publications

Maffei, A.F.X. 1882. *A Konkani Grammar.* Mangalore: Basel Services [Reprint: 1986: New Delhi: Asian Education Service]

Miranda, Rocky V. 1978. "Caste, Dialect, Religion and Dialect Differentiation in the Konkani Area." *International Journal of the Sociology of Language* 16. 77-92.

Pereira, José 1971. *Konkani: a language.* Dharwar: Karnatak University

Rajathi, J. 1976. *Survey of Konkani in Kerala.* Language and Mother Tongue. Monograph No. 4. Office of the Registrar General, India

Rajathi, J. & Kulshreshta, A. 1982. *Survey of Konkani in Karnataka, Goa and Maharashtra.* Language and Mother Tongue. Monograph No. 8. Office of the Registrar General, India

de Saussure, Ferdinand, 1916, 1984. *Cours de Linguistique Generale.* Paris : Payot

Southworth, Franklin 1976. "The verb in Marathi and Konkani." *International Journal of Dravidian Linguistics* 5.2.298-326